

令和6年度 第1回地域日本語教育とうきょう推進会議
議事要旨

令和6年7月11日（木曜日）

都庁第一本庁舎19階19E会議室及びオンライン

午後 3 時 0 0 分開会

○事務局 定刻となりましたので、第 1 回地域日本語教育とうきょう推進会議を開催いたします。

本日は、お忙しい中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。

本会議の事務局を務めさせていただきます、東京都生活文化スポーツ局都民生活部地域活動推進課多文化共生推進担当、田村と申します。座長が選出されるまで、事務局として進行役を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

本日は、対面とオンラインのハイブリッドで開催させていただいております。

オンラインで御参加の委員は、カメラは常時オンでお願いいたします。また、御発言いただく際、画面に表示されている手のひらのアイコン、手を挙げるボタンを押してからお知らせください。名前が呼ばれましたら、御自身の名前をおっしゃってから御発言をいただくようにお願いいたします。

会場にお越しいただいている委員の皆様におかれましても、御発言いただく際は挙手でお知らせをいただき、同様にお名前が呼ばれましたら、御自身の名前をおっしゃってから、御発言いただくようにお願いいたします。

なお、傍聴の皆様におかれましては、マイク・カメラをオフにして御参加いただきますよう、くれぐれもお願いいたします。

では、続きまして、出欠確認も兼ねて、委員の皆様を御紹介させていただきます。お名前をお呼びしましたら一言ずつ御挨拶をお願いいたします。

インターカルト日本語学校学校長、一般財団法人日本語教育振興協会理事の加藤早苗委員です。

○加藤委員 加藤です。よろしくお願いいたします。

○事務局 続きまして、武蔵野大学グローバル学部教授、神吉宇一委員です。

○神吉委員 神吉です。よろしくお願いいたします。

○事務局 続きまして、公益財団法人武蔵野市国際交流協会チーフコーディネーター、事務局次長、薦田庸子委員です。

○薦田委員 薦田です。よろしくお願いいたします。

○事務局 続きまして、本日、オンラインとなっておりますが、明治学院大学教養教育センター准教授、長谷部美佳委員です。

○長谷部委員 長谷部です。おはようございます。よろしくお願いいたします。

○事務局 長谷部委員は、今、イギリスにいらっしゃいますので、「おはようございます」でございます。

続きまして、エベレスト・インターナショナル・スクール・ジャパン初代理事長、ブパール・マン・シュレスタ委員です。

○シュレスタ委員 シュレスタと申します。よろしくお願いします。

○事務局 本日は欠席でございますが、葛飾区地域振興部文化国際課長の皆川広美委員も、今回新たに委員となっていていただいております。

続きまして、社会福祉法人さぼうと21学習支援室チーフコーディネーター、矢崎理恵委員です。

○矢崎委員 皆さん、こんにちは。矢崎です。今日もよろしくお願いいたします。

○事務局 東京日本語ボランティア・ネットワーク副代表、山形美保子委員です。

○山形委員 山形です。よろしくお願いいたします。

○事務局

ここで今回から新たに御就任いただきました委員を御紹介させていただきます。

せたがや国際交流センター職員、亀井信一委員です。

○亀井委員 初めまして、亀井です。よろしくお願いいたします。今年度から拝命しまして、微力ながら、現場で困っていることをフィードバックしていきたいなと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございます。

続きまして、こちらでもオンラインで御出席いただいておりますが、株式会社MAKOTO代表取締役、グエン・チュン・タイン委員です。

○タイン委員 皆さん、こんにちは。ベトナム出身のタインです。よろしくお願いします。

○事務局 ありがとうございます。

本日の会議の出席者は9名、欠席者は1名でございます。

次に、座長選出を行いたいと思います。

地域日本語教育とうきょう推進会議設置要綱第5の規定で、推進会議に座長及び副座長を置き、委員の互選により定めとなっております。どなたか御推薦のある方はいらっしゃいますでしょうか。

矢崎委員、よろしくお願いいたします。

○矢崎委員 神吉委員にお願いできればと思います。いかがでしょうか。

○事務局 ただいま神吉委員に、と御推薦をいただきましたが、皆様いかがでしょうか。

(了承)

○神吉委員 皆さん、ありがとうございます。よろしくお願いします。

○事務局 神吉委員、座長をお願いできますでしょうか。

○神吉委員 はい。

○事務局 ありがとうございます。

それでは、神吉委員に地域日本語教育とうきょう推進会議の座長をお願いいたします。

以降の進行を神吉座長にお願いしたいと存じます。

神吉座長、お願いいたします。

○神吉座長 改めまして神吉です。よろしくお願いいたします。

まず、議事に入る前に副座長の選出をさせていただきたいと思います。これにつきまして、私のほうからお願いをしたいと思っていますけれども、薦田委員にお願いできないかと思っております。武蔵野市において日本語教育、外国人支援等々様々な御経験をお持ちで、また、調整会議のときから副座長として支えてくださっていますので、引き続きお願いできればと思っていますが、いかがでしょうか。

(了承)

○薦田委員 それでは、務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○神吉座長 それでは、副座長は薦田委員にお願いするということで、今年度の新しい会議を始めたいと思います。

そうしましたら、本委員会は、設置要綱第6の3に基づき原則公開とされております。公開で進めたいと思いますが、皆さん、よろしいでしょうか。

(了承)

○神吉座長 では、特に御異議がないということで、公開という形で進めたいと思います。

それでは、本日の議事録等の取扱いについて、事務局から御説明をお願いいたします。

○事務局 ただいま会議を公開にすることが決まりましたので、議事録は、氏名入りでホームページに後日公表させていただきます。

事前に事務局で作成いたしました議事録案につきまして、発言者の皆様に確認をさせていただき、最終的な確認は、座長に御一任させていただければと存じます。

なお、個人情報に係る事項等がある場合には、座長と相談して対応したいと存じます。

以上でございます。

○神吉座長 ありがとうございます。

それでは、事務局から本日の議論の進め方について御説明をお願いいたします。

○事務局 ありがとうございます。

では、本日の議題に入る前に本会議の進め方について御説明をさせていただきます。

資料3を御覧いただけますでしょうか。

令和6年度のスケジュールと議論の進め方でございますけれども、今年度は第2回目までの開催を予定しております。第1回目が本日、第2回目が来年1月頃を想定しております。

本日の議論の進め方についてですが、令和4年度末に公表した「東京における「地域日本語教育の体制づくり」のあり方」の実現に向けて、皆様から御意見をいただきたいと考えております。

本日は様々な御意見をいただきたいという趣旨からフリーディスカッションという形で議論を進めていきたいと考えておりますが、議論の前提となります「東京における「地域日本語教育の体制づくり」のあり方」で定めた目標ですとか、体制づくりのために、都やつながり創生財団がこれまで行ってきた各施策について、振り返らせていただきたいと考えております。

第2回目については、本日の議論を踏まえて、体制づくり実現のための様々な主体との連携のあり方などを整理していきたいと考えております。

これまで都は、「東京の地域日本語教育に係る調整会議」を設置しまして、地域日本語教育の体制づくり推進のために、様々な議論を行ってまいりました。後ほど改めて御説明させていただきますので、詳細は省略させていただきますけれども、令和4年度は区市町村が主体的に地域日本語教育の体制を構築する上で参照できるように、都の目標と目指すべきレベルを定めた「東京における「地域日本語教育の体制づくり」のあり方」を策定し、令和5年度は体制づくりを進める上で必要となる人材（コーディネーター）について議論を行ったところです。

このように令和4年度と令和5年度は、東京の地域日本語教育の体制づくりのための枠組みについての議論を行ってまいりましたが、令和6年度はこれまでの枠組みの議論からフェーズを変えて、実際に地域で体制づくりを行っていくための具体的な議論にシフトしていきたいと考えております。

そのため、今年度の会議では体制づくりの取組を地域の各主体にどのように広げ、参画してもらうかですとか、各主体がどのようにしたら連携をしていけるのかとか、体制づくりの

推進のために東京都が国に対して訴えていくべきことなど、具体的な方策も含めて議論を
してまいりたいと考えております。

そして会議名もより具体的にということで、これまでの「東京の地域日本語教育に係る調
整会議」という名称から、「地域日本語教育とうきょう推進会議」に変更をさせていただき
ます。東京都全域で地域日本語教育の取組をますます推進していくという決意を会議名称
にも込めましたので、以後、推進会議と呼ばせていただきたいと思います。どうぞよろしく
お願いいたします。

事務局からは以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。

ただいま事務局から御説明がありましたとおり、過去、私たちも様々な議論をしてしまし
た。その中で基本的な考え方、方針、進め方、この辺りはある程度固まって、それを展開す
ることもできていると思いますが、では、今まさに御説明があったように、具体的にそれぞ
れの区市町村と一緒に何ができるのか。当然、各地域で現状が異なります。既にかんりの取
組を進めているところもございますし、これからどうしていくか考えるというところもあ
ると思います。

そういった多様な各自治体のニーズに応えつつ、一緒に進めていくためには、様々な取組
の方向性というのを、いろいろな観点から議論して、丁寧に進めていくことが必要だと思っ
ています。まさに、この会議で有識者の皆さん、いろいろなお立場で、いろいろな御経験の
ある方々がお集まりいただいていると思います。皆さんの今までの御経験、知見等々を、ぜ
ひこちらで御意見として出していただき、各地域で、よりよい取組が少しずつでも進むよう
に御協力いただければと思います。よろしくお願いいたします。

では、改めて、地域日本語教育の体制づくりについて、事務局からもう一度、御確認のた
めに御説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございます。

では、これまでの都とつながり創生財団の取組について御説明をさせていただきます。

資料4を御覧ください。

東京都は、先ほども申し上げましたが、令和4年度に、区市町村が主体的に地域日
本語教育の体制を構築する上で参照できるよう、都の目標や目指すべきレベルを定めた「東
京における「地域日本語教育の体制づくり」のあり方」をまとめました。

あり方では、「日本語教育を通じて、外国にルーツをもつ人々と地域とのつながりをはぐ

くむ」という目標の下に、その目標の達成のために初期段階の日本語教育を行政が保障するという、それから、外国にルーツを持つ人々が地域社会とのつながりを持つための取組を行うということを必要な考え方として示しました。

その下にありますイラストが、目標のイメージ図です。外国にルーツのある方が地域で自立して暮らしていくためには、日本語学習の場だけ提供すればいいのではなく、その後の地域での暮らし、生活が豊かになるための地域づくり、日本語教育が行われなければならないという思いを込めております。

令和5年度はあり方を踏まえて、地域日本語教育の体制づくりを進める上で必要となるコーディネーターについて議論を行いました。

国は、地域日本語教育の体制づくりのために各地域で地域日本語教育コーディネーターを設置することを求めています。東京都の地域日本語教育コーディネーターは、行政の職員が担っていることがとても多いです。そのような場合、体制づくりに必ずしも一人で取り組む必要はなく、足りない部分を補い合い、得意な部分で貢献できるチーム体制で地域日本語教育のコーディネートを行うことを視野に入れた、体制について提示させていただきました。

また、チームで地域日本語教育に取り組んでいる様々な地域の事例というのも御紹介させていただきました。

さらに令和6年度、今年度ですけれども、国の体制づくりの補助金に加え、初期段階の日本語教育を行政が保障するために、日本語教育に関する専門性を備えた団体や支援者と連携して体制を整備する場合、都の補助を4分の1新たに上乗せし、区市町村の体制づくりの取組をさらに後押ししております。

また、本日、お手元に「地域日本語教育のはじめてハンドブック」を配付させていただきました。体制づくりに取り組めていない、地域日本語教育に初めて携わるといった区市町村の職員の方向けに、地域日本語教育の重要性を理解していただき、体制づくりの参考にしてもらいたいと思い作成したものです。

昨年度の会議の場でも委員の皆様から様々なアドバイスをいただきまして、また、取材にも御協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。こちらのハンドブックは、全区市町村に配付させていただきました。

次のスライドです。

こちらは今年度の東京における地域日本語教育の実施体制でございます。東京都とつな

がり創生財団が連携して、区市町村の地域の実情に応じた体制づくりを支援するために様々な施策を行っております。

東京都の取組は先ほどお話をしたとおりでございます。

財団のこれまでの取組について簡単に御紹介させていただきます。

○つながり創生財団 東京都つながり創生財団の伊藤です。

では、続きまして、当財団が今年度実施する事業について御説明させていただきます。

財団では令和4年度から総括コーディネーターを配置しまして、各区市町村が配置した地域日本語教育コーディネーター等を対象に連携会議や研修会などを実施して、情報共有やネットワーク化を図ってきました。

今年度は財団内に新たに地域日本語教育コーディネーター2名を配置しまして、日本語教室を訪問して現場の意見を直接聞く、日本語教室について広く都民に知ってもらうために情報発信するなど、より地域とつながりをもって活動しております。資料に載せておりますのは、あきる野市の日本語教室を訪問して作成した記事なのですが、あきる野市役所のホームページにも掲載していただきました。今後は自治体職員を対象に、ほかの地域の日本語教室を視察する機会もつくっていく予定です。

地域日本語教育コーディネーター連携会議につきましては、昨年度と同様に年2回行います。また、会議で挙げた課題の解決のために、研修会や意見交換会を実施しまして、区市町村等による地域日本語教育の体制づくりを支援します。

日本語学習支援者スキルアップ研修につきましては、昨年度に引き続き、日本語教室で核心的な活動をしている方や自治体職員などを対象に、専門知識に関する研修や課題解決のためのグループディスカッションを実施する専門研修を開催します。また、昨年度の参加者から意見交換を継続したいという御意見がありましたので、今年度からこれまでの参加者を対象にフォローアップ研修も実施いたします。

東京日本語教室サイトは、令和3年度に55教室を掲載して運用を始めましたが、令和5年度末で掲載数が263教室となりまして、メールフォームを利用した学習希望者やボランティア希望者からの問合せも、年間2,956件となっております。昨年度は英語、中国語、韓国語と多言語化しまして、今年度はさらに120言語の自動翻訳を導入する予定となっております。

また、日本語教室と日本語学校の違いが分からないといった声も聞きますので、日本語教室について周知を図るための動画を作成しまして、SNS等も活用して東京日本語教室サ

イトの利用につなげていく予定です。

最後に、財団の情報発信担当が実施しております、やさしい日本語に関する資料も御紹介いたします。

やさしい日本語普及啓発事業では、広くやさしい日本語の認知度向上を目指す普及啓発事業と、活用促進に取り組む人を育成する人材育成事業を実施しております。

令和5年度に作成したやさしい日本語ブックレット、こちらになりますけれども、こちらでは様々な組織分野の活動事例を紹介しております。やさしい日本語に関するイラストの提供などもしておりますので、ぜひ、東京都多文化共生ポータルサイトのやさしい日本語コーナーを御覧いただければと思います。

では、都にお返しいたします。

○事務局 最後になりますが、冒頭座長からのコメントにもありましたとおり、都としても、この間、つながり創生財団とともに区市町村へのヒアリングですとか、地域の日本語教室への訪問などを行ってきたところでございます。

当たり前のことではありますが、地域の課題は、その実情により様々でございました。これまで、東京都における地域日本語教育の体制づくりというのは画一的に何かゴールを示せるものではなく、地域の実態に応じて、その取組は様々であってもよいのだということを調整会議の中でも確認してきたところです。それは当然、行政の取組だけでなく、地域の日本語教育に携わる方々の状況やその取組への考え方も、当然、様々あるということは理解しております。

ただ、今後、日本で暮らす外国人がますます増えていく中で、地域で暮らす外国人が自立し安心して暮らしていけるような地域づくりを行っていくためには、地域の様々な主体が地域日本語教育のあり方を理解し、同じ方向を向いて体制づくりに取り組む必要があると考えています。

本会議に出席されている有識者の皆様は、様々なお立場で地域の日本語教育を支えてくださっている皆様です。皆様のお立場から、地域の各主体が体制づくりに参画するためには、どのようなアプローチ方法があるのか、ぜひ忌憚なき御意見を賜りたいと考えております。

事務局からの説明は以上となるのですが、本日、御欠席の皆川委員からは事前の意見聴取がございませんでしたので、後日、事務局より本日の議論の結果を御報告しまして、意見をお伺いした後、また、後日、皆様にも共有させていただきたいと考えております。

以上となります。座長にお返しいたします。

○神吉座長　ありがとうございます。

まさに、今、事務局から最後に言っていただきましたとおり、ここの検討内容、改めて確認をいたします。地域の各主体に向けて、体制づくりの取組への理解と参画をどのようにしたら促進できるのかということです。

先ほども申し上げましたけれども、様々な自治体の状況があります。本当に、もう、さあやりましょうといったら、こうやるのですよねというふうにいけるところもある一方で、では、取りあえず日本語を順番に教えたらいいいのでしょうかというところもあるはずだと思います。

そういった状況の中で、私たちが進めていこうとしている東京都の地域日本語教育の方向性、これを理解してもらいながら、一緒に進めるために、どういうふうな取組を考えていけばいいのか。どういうことを議論すると、各地域の日本語教育が少しでも前に進んでいくのかということですね。

それから、二つ目に、地域の様々な主体に期待される役割、それから連携のあり方です。いつも出ている連携の図があります。様々な団体、プレイヤーですかね、そこと連携をしていく必要がある。この連携の形も、また各自治体によって様々だと思いますけれども、どういうあり方が考えられるのか。

それから、三つ目、都の役割です。基礎自治体とは違い、都の役割として、国に対して今度は何を要望していくのか、どういったものを国に対してボトムアップで見せていくのか、この辺りも非常に重要な観点だと思っています。

主にこの三つを柱にしつつ、派生することでも構いませんので、いろいろと御意見をいただければと思います。限られた時間ですので、拡散し過ぎないといいなと思いながら、うまくかじ取りができるかどうかちょっと自信がありませんけれども、ぜひ、まずは皆さんの忌憚のない御意見を聞かせていただければと思います。

それでは、今から約1時間20分ぐらいあります。たっぷりございますので、皆さん、どういった観点からでも構いません。また、確認等々がございましたら、そういうところでも構いませんので、御意見をお願いできればと思います。いかがでしょうか。

○山形委員　話に入る前に、今、見せていただいた資料ですが、写真を撮ってもよろしいでしょうか。

○事務局　後日、公表もさせていただきますので。

○山形委員　そうですか。分かりました。

○神吉座長 資料は公開資料ということで大丈夫です。

よろしいですか。ほかは何か確認等があれば、今、お伺いします。よろしいでしょうか。

シュレスタ委員、お願いします。

○シュレスタ委員 先ほどもお話があったように、会議の名前に平仮名の「とうきょう」と入っている。これは何か特別な意味がありますか。

○神吉座長 では、事務局、御説明をお願いできますか。

○事務局 事務局です。

東京を漢字にしてしまうと、全部漢字の羅列の会議になってしまって、どこで区切るのがいいのだろうか。我々が東京都として、まず、きちんと地域日本語教育を具体的に進めていくというところで、「とうきょう」を少し目立つような形で平仮名にさせていただきました。おやっと思つて、どういう会議なのだろうかと関心を向けてもらうのが一番かなと考えています。ありがとうございます。

○シュレスタ委員 ありがとうございます。

○神吉座長 よろしいですか。

○シュレスタ委員 はい。

○神吉座長 ありがとうございます。

それでは、御意見その他いただければと思いますが、いかがでしょう。皆さんが実際に関わっている、または直接は関わっていないけれども、ある程度知っているような自治体で、今、取組の理解とか参画、これを今以上に進めていこうとしたときに、例えば、どういった課題があるのかとか、またはこういうやり方をされていて、今、うまく進みそうですよという事例があるのかどうか、その辺りはいかがでしょうか。

では、シュレスタ委員、お願いします。

○シュレスタ委員 シュレスタと申します。

資料を全部、全体的に見て、先ほどの資料4の2枚目のスライド、いろいろな行政とか学校とかが入っている図表のところに、あるいは全体的に見て、これは地域にいる外国人向けの日本語教室、あるいは体制づくりだと思います。私は前から言っていましたが、どこか外国人コミュニティを参加させるのが推進する一つの方法としてあるかなと思っています。

資料の中で、ほとんどここに入っているのは、多分、NPO、NGOとか、自治体もほとんど日本人の方々がメインになって動いていると思うのです。でも、そういう、各自治体とかにはないかもしれないのですけれども、全体的に外国人コミュニティとか、外国人のリソ

ースパーソンとか、あるいはエスニックメディアとか、そういう人たちの役割もどこかに入れたほうが、外国人が参加できるような仕組みがあったほうがいいのかと思っていて、その辺りの考え方としてはどうなっているかなという確認をしたいですね。

○神吉座長 事務局、簡単にお答えいただくことはできますか。今、考え方としてどうなっているか。

○事務局 外国人コミュニティが参画できる仕組みといたしますと、それも本当にそれぞれ区市町村の取組状況によって様々かなとは思っていますので、ここで東京都として何か仕掛けているというところは、今のところはないと言えないのですが、むしろ逆に、そういったところをどういったら仕掛けられるのかということも含めて御意見をいただきたいなというふうに思っているところです。

すみません。質問返しみたいになってしまって申し訳ないです。

○シュレスタ委員 ありがとうございます。

○神吉座長 ありがとうございます。

皆さん、いかがでしょう。外国人コミュニティ、またキーパーソン、そういった方々と一緒に地域の日本語教育を進めている事例等々、つながり創生財団のいろいろな情報も含めて何かありましたら、ぜひ、お願いいたします。

では、財団から、伊藤さん、お願いします。

○つながり創生財団 財団も都と同じで、基本的には後ろから支援するという体制になっておりますので、直接、コミュニティとつながって支援をするということではできていないのですけれども、行政の方から伺うのは、日本語教室につなげるべき外国人がどこにいるのか分からない。本当は地域内で困っている外国人を地域の日本語教室につなげていきたいのだけれども、その人たちがどこにいるか分からない。その人たちがどんな日本語教育のニーズがあるのか分からないといったお声をお聞きます。

本来は、そういったことを日本人だけで考えているのではなくて、ニーズがある外国の人にこそお話を聞きして、どこにいる外国人にどんなふうに声をかけて、どんな日本語教育をやっていくかということと一緒に考えられるといいのではないかなということ、会議等で区市町村の方々とお話しているところです。なかなか都内でそういった実践がされているという状況ではないのですけれども、今後、何か一緒に進められるといいなと思っております。

○神吉座長 ありがとうございます。

エスニックコミュニティとのつながりを通して日本語教育の情報を拡散していく。逆に日本語教室に参加する人たちとつながりをつくっていくという、そういったところですね。

そういった事例って、どこかありますか。広報って結構難しくて、届けたいところになかなか届かないという状況もあると思いますけれども。

山形委員、いかがでしょうか。

○山形委員 TNVNの山形です。

今日の午前に、私たちの教室に通ってきている学習者20人ぐらいと、それからエベレスト・インターナショナル・スクールのお子さんたち40人と一般の外国人の人たちを対象として、消防署での防災講座みたいなことをしたのですけれども、それがありますよというお知らせは、私たちは教室を通して皆さんにお伝えし、杉並区交流協会と、それから杉並区の中の多文化共生部署と消防署がコラボして通知しました。それもシュレスタさんがおっしゃるように、地域にはいろいろなコミュニティがある、そのキーとなる人に届くようなコンタクト方法を持っていればいいのですけれども、どこに行ったらリーダーに会えるのかという、それがなかなか難しいのですよね。

私たちも、例えば、ベトナムやネパールの人が来たら、グループはありますかとお聞きして、そこにアプローチしてみたいなとは思ったりするのですけれども、たまたま私が聞いた人は、そういうグループとは離れて生活していますというお返事でした。

カーストというような話をした人もいましたし、それから、政治的な背景で日本に来ている人たちは、なかなかオープンにできないような部分もあるのかなと感じます。そういう人は全体から見れば、そんなに多くはないのかもしれませんが、私たちも早くそれぞれのグループとつながりを持っていきたいな、そのためにはどうしたらそれができるのかなというように、皆さんにお聞きしたいと思います。

○神吉座長 いかがでしょうか。

では、タイン委員からお願いします。

○タイン委員 ベトナム出身のタインです。

ちょっと意見を言わせていただきます。

実際、自分の話でも、2010年頃に世田谷区の日本語ボランティアに1回だけ参加した記憶があるのですけれども、その後は特にどこにも参加しませんでした。

今回、東京都の地域日本語教育ということで、ターゲットというか、今、東京都の66万人ぐらいの外国人の中で誰が対象になるか。多分、一番困っているのは、単純労働者、いわ

ゆる特定技能とか、家族滞在とか、あと一部の身分ビザの方々がいらっしゃると思いますが、そういう方々にアプローチするためにはどうしたらいいのかという課題があります。

今、全体的に日本に来ている外国人は、たしか中国が1番で、ベトナムは2番で、彼らは全国にいまして、単純労働者が多いです。特にベトナム人の単純労働者に対するニーズは非常に高いです。なぜなら、実習生から特定技能に切り替えるためには日本語を必死に勉強しないとイケない。彼らは、今、オンラインを通じてベトナムの業者が行っている日本語教育を受けています。

東京都つながり創生財団が運営されている東京日本語教室サイトを見たら、すごくためになると思っておりまして、ただ、東京都内に住んでいる方向けですので、もちろん、そういう日本語を勉強したい方は東京都内にはたくさんいまして、オンラインでつながって勉強する方法はまさに一番彼らにとってはすごくためになりますし、どこでも参加できるということで、利点がたくさんあります。

どうやって彼らに情報を届けるのか、これはまたもう一つの課題です。すごくいいものがあり、つくられています、利用したい人たちに結局は届かないというのは課題です。どうやって外国人に発信するのか、SNSの活用は一つの方法ではないかなと考えられます。ベトナム人でしたら、Facebookはみんな使っている、その情報などを改良して発信すればいいのではないかなと思います。

以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。

今、SNSというお話がありましたけれども、ホームページとかだと、やはり情報は届きづらいという感じですか。

○タイン委員 そうですね。ホームページだけでは分からない。今、世の中でどのぐらいのホームページがあるのか。もちろん、検索したら出ますが、自分の国の言葉で検索しても、恐らく出ないです。なので、SNSを通じて宣伝するのがいいのではないかなと思います。これはあくまでもベトナムコミュニティの中の話です。

○神吉座長 ありがとうございます。

長谷部委員、お願いいたします。

○長谷部委員 ありがとうございます。

今、まず、外国人コミュニティの話がシュレスタ委員から出ていて、どのグループとつながったらいいか分からないという、本当にそのとおりだなというふうに思いながら聞いて

いたのですけれども、解決方法として、一つはタイン委員が言ったように、F a c e b o o k。今の神吉座長がおっしゃった質問、ウェブサイトはどうでしょうというのは、多分、絶対検索しませんよね。

万が一、日本人の私たちが外国に行ったというふうに考えたときに、例えば、アメリカに行くから英語で検索するかといったら、みんな、英語で検索しませんよね。日本語で検索して、もらえる情報の中で動くと思うのです。そう考えると、日本語で検索するしかアクセスができないサイトというのは、多分、なかなか外国人の人は検索できないと思うので、母語で情報が発信されるというのが実は重要なのかなというふうに思っています。

大変なことだとは思いますが、ただ、1回テンプレートみたいにして作ってしまえば、母語で、例えばF a c e b o o kに流してもらったり、いろいろ作れると思うので、取りあえず、一旦母語で、とにかく自分たちに向けられた情報なのだなということが利用者に分かっていたらいいような言葉で作るところを1回配慮していただくのがいいのかな。その上で、ウェブサイトにするのか、F a c e b o o kにするのか、その辺は分からないですけれども、できるだけ広報するというのが一つかなと思うのです。

もう一つ、実は、私、何せ活動経験が長いので、もしかして、アナログな方法がいいのかなと思っているのです。自分たちのところでもやったことがあるのですけれども、一度、浜松に伺ったときに、そこの日本語教室の方が何をしていたかという、基本的には、浜松はベトナムの方が多いのですが、小さなベトナムのお店とか、あるいはベトナムのレストランとか、そういうところにチラシをごっそり持って行って、これを貼らせてくださいとか、これを置かせてくださいということをやっていました。

それは、それだけでいいと言っている意味ではなく、F a c e b o o kにアクセスできる人とそうでない人もいると思うので、案外、物産展とか、レストランとか、そういうところに、そのときもできれば、母語でベトナムの方に発信する、例えば、シュレスタ委員がおっしゃったようなネパール語を通して、それを物産展とかレストランとかに持って行って置かせてもらうとか、そういう結構地道な作業も必要になってくるのかなというふうに思っています。

ごめんなさい。あと、もう一個、スライドをもう一回映していただくことはできますか。主体の図があったスライドページ。

何が言いたかったかという、主体のところには行政機関とか国際交流協会とか、いろいろ書いてあったかと思うのですけれども、あと、民間団体の役割というのを、ぜひ、もう一度、

どこかにしっかり記入していただけるといいかなというふうに思っています。今多分、行政から外国人のコミュニティと民間の機関へつながれないから、なかなか出てこない話なのだと思うのですけれども。

日本語教育というか、特に地域の日本語という観点でいうと、これまで本当に40年間、日本で外国人労働者問題というのが起き始めてから、ずっとボランティアの日本語教室が外国人に日本語を教えてきたという経験があるかと思います。法律ができて、初めて、行政の人たちが動くのと違って、困っているから、とにかく隣の人が何とかするという形で始めてきた日本語教室って、多分山のようにあると思うのです。なので、できれば、多分、その情報が、場合によると、国際交流協会ともつながっていないということがあるかと思うので、ぜひ、民間団体、いわゆるNPO・NGOさん、地域のボランティア団体さんとはできるだけ積極的につながってノウハウを聞くとか、あとはそこに来ている日本語教師ってどういう人たちがいるのかなどということ、一度、行政の皆さんに聞いていただくということがあると、すごくいいのかなと思うのです。

ぜひ、主体として、一番には、とは言わないですけれども、外国人コミュニティと民間団体がそれぞれすごく情報を持っているはずだという認識を行政のほうに持っていただくというのが重要なかなというふうに思っています。

すみません。長くなりました。以上です。

○神吉座長　ありがとうございます。

今の長谷部委員の御意見は、各区市町村で実施していくときに、その域内にある様々な団体が例えば一堂に会して、何か意見交換とか情報交換会をしましょうみたいな、そういった仕掛けがあるといいですねみたいなことも含んでいる御意見という理解でいいですか。

○長谷部委員　もちろん、そこまで至ればいいのですけれども、多分、なかなか一堂に集まってくださいといって、地域の日本語教室の本当にボランティア教室の方々が、すぐには、「はい、そうですか」と言って集まるとはあまり思えないというのが私の悲観的なところで。ぜひ、すこし手間だと思うのですが、1回、行政の職員にしろ社協の方にしろ、そうですね、どのレベルなのか、都が動く必要があるかどうかというのはよく分からないのですが、1回、やはりアウトリーチをしていただいて、地域日本語教室のまず実情とか、そこにつながる外国人とかということの把握をしていただく、何か一度作業があった上で、その上で、「どうでしょう、ほかの教室さんと連絡したくないですか」みたいな、そういう提案をしていただくという意味です。多分手間がかかるかと思うのですけれども、地ならしをした

後で、ぜひネットワークみたいな会議もあればいいのかな。そうですね、2か月に1回ぐらい、あまりメリットがないと、なかなか皆さん参加しないと思うので、それぐらいのペースで、地ならしをした後にネットワークみたいなのができればいいかなと思います。

すみません。また長かったです。

○神吉座長 いえ、ありがとうございました。

まずはこちらから足を運ぶということが重要だというふうに解釈をいたしました。ありがとうございます。

ほかに類似のこと、また、今の御意見を踏まえて等々ありましたらお願いします。

矢崎委員、お願いします。

○矢崎委員 さぼうと21の矢崎です。

今、おっしゃったように、足を運ぶということが大事かなというふうに思っています。私たちの失敗の例なのですけれども、やはり、防災のことを多くの外国の方に知ってもらいたいと思って、ある団体を介して、この会場で通訳もつけて防災のワークショップをしますというふうに、いろいろな人に伝えたことがあって。情報は届いたと思うのですけれども、ある日、あるとき、ある場所に呼び出しても、義理で1家族来ただけだったのですね。そんなものだろうなと思っていて、やはり自分だって行かないよねと、そんなことを思ったのですけれども。

それで、その後、これは続いていないので、あまりいい例ではないのですが、今度、では、どうしようと考えて行ったのは、母語でのミサを、大きな教会ではないようなところでも、皆さん、マンションの1室を定期的に集まるミサの場所にしていらしたりする。そこに出向かせてもらって、ミサの前とかの時間をもらって、長い時間はお話ししないけれども、大事なことなので聞いてくださいというふうにやらせていただいたことがあって、それは好むと好まざるとにかかわらずいらっしゃるので、そこでコンタクトの機会を得たということはありません。

なので、こちらに来てくださいではなくて、そちらに伺わせていただいてもいいですかということと、ネタを持っているということが大事かなというふうに、「あつ、聞いてよかった」と思っただけないといけないので、やはり、その二つは必要かなというふうに思っているのが、今、長谷部委員のお話も聞きながら思ったところです。

ただ、何でもエスニックコミュニティが全てかということ、結構、関係性も難しかったりすると思うので、いろいろなエスニックのコミュニティもあって、まとめてはなかなか難しい

と腹をくくり、小さなグループに、まめに継続してコンタクトを取れるということが大事ななというふうに思っています。

あと、私たちの教室は、最近、ボランティアで留学生が来てくれることがとても多くなってきたなと思っています。日本語がとてもお上手だったり、日本語はそんなではなくても、子供たちと接したりするのが上手な外国の方って多いなと思うのですけれども、彼らはボランティアとしてやってきて、日本人のほかのボランティアの方ともいろいろな関係を持ちながら活動しているので、外国の方が常に支援をされる側ではない時代だと思っているのが、一つです。

あと、この前、面白かったのは、留学生の方がボランティアで来ていて、ほかの大学生もボランティアで来ているのですけれども、そこで感じたのは、私たちの世代と若い世代は、打ち解けているのは若い世代同士のほうが話題も合っていて、コンサートに行ったとか、アイドルの話みたいなことをして、私たちシニア世代は、そこにはちょっと入れなかったりするので、実際には何か壁を越えて、いろいろな人たちがつながり得るような、当たり前ですけれども、時代にもなっているのかなというのを、ちょうど先週ぐらい、痛感していたところだったので、そういうことがどんどん広がっていくと、無理なくていいなというふうに思っています。

以上です。

○神吉座長　ありがとうございます。

エスニックグループの話と、支援の情報を届けるというだけではなくて、その人たちにも一緒に形をつくっていくところに参画してもらおうというのが非常に重要だということですよ。一方的に支援の対象ではないというところが結構重要ななと思いました。あと、今、若年層同士というのがいいですね。

○矢崎委員　無理なくやり取りをされていたようにお見受けしました。

○神吉座長　ほかの地域だと、例えば大学の単位としてインターンシップ的な授業で、地域の教室に行くと、それが単位化されるみたいなことを、ある市がやっている事業に対して、その市の市立大学が組んで単位化しているみたいな事例も聞いたことがあるのですけれども、そういったことも含めて、いろいろとやりようはありそうですね。

ほかにありますか。薦田委員、お願いします。

○薦田委員　今の先生のお話の事例というのは、まさにうちがやっていることなのですが、東京学芸大学の授業で、日本語教育を専攻されている大学院の学生さんが、私たち

の子供教室に協力をしてくださっていて、そこに参加されているのが、今年は留学生が4人来てくださりまして、4人と日本人の大学生と一緒に子供をサポートをしてくださっています。

○神吉座長 ありがとうございます。

ほかに類似の事例はございますか。

山形委員、お願いします。

○山形委員 私たちの教室にも、地域的に東京女子大が近いので、そちらの日本語コースの学生さんが来たり、それから、そこで夏に開く日本語のコースに、どうぞ来てくださいという募集をかけてくださったり、それから、各地の日本語教師養成講座からも随分、地域の教室を見せてくださいと依頼が来ています。見にいらして、それでボランティアが面白そうだからやってみたいという人が、一人、二人、今、そういうケースが増えてきています。

○神吉座長 ありがとうございます。

今、エスニックグループ、それから若年層、教育機関とかが出ましたけれども、ほかにも何か連携、その他アイデア、または事例はございませんか。

長谷部委員、お願いします。

○長谷部委員 ありがとうございます。

今の矢崎委員のおっしゃった留学生というのは、実は私もケースとしては何件か知っています。私の関わっている一番身近なところではないのですけれども、ほかの団体さんで、私は明治学院大学というところに所属しているのですが、その留学生が中国帰国者の方々の高齢者のために日本語を教えたりとか、あるいは、そこに来ている、全然話せない、ゼロベースの小学生の子供に中国語を使って日本語を教えるというケースがあったりする。

そういう意味では、留学生はすごく大事にしたほうがいいというか、参加するときに、自分たちの志というのでしょうか、自分の国の出身の人たちで困っている人たちに何とかしたいという気持ちが結構強くあったりするので、その辺り、留学生はぜひというのが一つ。

あと、もう一つは、私、ほかの会議では何度か言っているのですが、いわゆる移民の第2世代で若い子たちですよね。自分の母語と自分が暮らしているところの日本語を両方しゃべれる子たちというのは、一定数、いるかと思うので、その子たちをどうやって巻き込むかというのは、また問題が別になるのですが。彼らは自分の生活があるので、必ずしも活動ができるというわけではないのですが、私が関わっているところで、長らくずっと第2世代の子たちが新しく来る子供たちにどんどん言葉を教えたり、勉強を教えたりということは、本

当に長年やっていますので。

エスニックコミュニティとか、移民バックヤードがある人といったときに、留学生ももちろんなのですけども、日本で生まれた、あるいは日本で育った第2世代の子たちというのも、本当は何かつながっていただいて、支援する側に回っていただくことができればいいのかなと思います。本人たちが経験していることなので。

留学生は国で勉強してきて、全てが分かるようになっていきますけれども、移民の第2世代の子たちというのは自分たちも苦勞して、日本国内で勉強して、親は母語をしゃべってみたいな環境の中で生きている子たちなので、彼らの経験というのもすごく貴重なことだと思います。なので、そこに積極的に参加してもらえるといいなというふうに思うところがあります。

しかし、最後に、もう1点なのですが、どうしても大学というと、ボランティアを出してほしいというふうにもものすごく期待されるのですが、留学生は一生懸命やってくれるけれども、日本の学生がうまくいかないみたいなことは結構あって、継続して関われないとか。案外、先ほど、神吉先生が単位の話をしたので、若干、私もそういう授業を持っていたのですが、単位なのに来ないという学生も結構いるとか、案外、大学生は今ちょっと難しい立場にあるということだけ。

もちろん積極的にやる子もたくさんいますが、単位でということになってしまうと、なかなか興味半分というか、モチベーションが欠けてしまうということもあるので、そこを探すのは案外大変ですということだけです。神吉先生は日本語の先生なので、受け持っている学生さんもきちんとした学生さんが多いかと思うのですが。ボランティアという形で集めると、案外難しいですよということだけ、すみません、今、矢崎委員が大爆笑しているのではないかと思います、以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。はい、うちの学生は優秀ですので(笑)。

いやいや、どこでも同じで、興味関心から始まるというのは一番いいと思うのです。単位化することによって、確かに単位のためだから、しょうがなく、という言い過ぎかもしれませんが、そういう可能性はもちろんあります。

その辺りも含めて、接点をまずどうやって持っていくか、接点を持った上で、次の一步にどう踏み込んでもらうかというのは、恐らくいろいろなあり方があるのだろうなと思って、今、伺っていました。ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。はい、亀井委員お願いします。

○亀井委員 せたがや国際交流センターの亀井です。

今の話とちょっと違うかもしれませんが、コミュニティにアプローチするというのは、我々も、私の立場としては国際交流協会とかセンターみたいな立場だと思うのですが、正直言って非常に難しいです。どこの協会でも同じだと思うのです。世田谷の場合は、特に集住地域みたいなところがあるわけでもなく、エスニックコミュニティなど見えるわけでもなく、なかなかそこにたどり着くというのは難しく、正直言ってコミュニティどころか、外国人の方に何か参加していただくということ自体が難しいです。

実際に事業をやるときには、そういうときは世田谷の中に大学があるので、留学生の人たちをお願いするとか、そういう形で参画していただくということができるのですけれども、在住の方々に何か交流会をやるので来てくださいといっても、なかなか来てもらえることはない、ほぼほぼないですということです。

今、世田谷区では、日本語教室と、それから日本語のサポーター講座というボランティアを養成する講座を区がずっとやっていたのですけれども、今年から財団、我々のほうに事業が委託されたということもありまして、私もこの4月から携わっているのですけれども、やり始めて思ったことは、日本語教室をやると、当然、日本語を勉強したいという人が申し込んでくるのです。そうすると、その人たちと、コミュニティではないのですけれども、個人とつながることできて、今までは全然見えなかった人たちが、こんなところに、こんな人たちがいるのだ、みたいなのが見えるようになったというのがあるので、行政が日本語教室をやっていくメリットの一つなのではないかなと思うのです。

そこへ申し込んでくる人たちは、お母さんと子供がいたりとか、働いている人たちがいたりとか、大学生の留学生の人たちで、詳しく勉強したいからという人たちが来てくれたりするので。そういう人たちと直接話ができるようになったというのは、今年すごくよかったことで、それを次につなげていけたらいいなというふうに思っています。

そういう日本語教室に通ってきてくれている外国人の人たちと、一方で、日本語のサポートをしたいと思っている方々が、世田谷の場合は、かなりたくさんいらして。そういう人たちをどういうふうにマッチングさせていくのかというのが、私の今年の課題だというふうに思っています。

コミュニティという観点だと、そういうところが今、課題かなというふうに思っているのですが、そういうところからタッチしていくとか、接点を探していくのが一番いいのかなと思います。どこに行ったらコミュニティがあるのだろうということで、ずっと悩んでいまし

たけれども、そこはちょっと違う突破の仕方があるのかなというふうに思っています。

○神吉座長 ありがとうございます。

今、マッチングのお話がありましたけれども、マッチングの難しさというのは、それぞれの予定とか都合みたいな部分なのか、その辺り、もう少しだけお話しいただけますか。

○亀井委員 続けて亀井です。マッチングが難しいといっているのは、マッチングしていくこと自体はあまり難しくないと思うのですけれども、今まで世田谷区でもそうだったと思うのですけれども、多分、行政の人たちが、ボランティアの団体の人たちに対して、そこにあっせんするとか、ボランティアの育成はやるのですけれども、そこで育成した人たちをボランティア教室につなげるということが、なかなか行政だとやりにくかったのだと思うのです。ここは僕の想像の域を越えないのですけれども。

そこを行政の人がどういうふうに感じているか分からないのですけれども、そこは我々国際交流センターみたいなところが間に入ることによって、そのボランティア団体の人たちと、それから、我々が主催して集めてボランティアを育成しているというコースに出てくれていた人たちをマッチングするというのが、今年初めてできるのではないかと思います。交流会か何かを持とうと思っていますけれども、そこはあまり難しいことではないと思うので、むしろ行政がそこは難しいのではないかなというのがあります。

行政の人たちが、そういうふうに自分たちがボランティア教室をあっせんしますというのだったら別にそれはいいと思うのですけれども、多分難しいのではないかなと思うのですよ。

○神吉座長 それは公平性の問題とか。

○亀井委員 公平性の観点もあってですね。

ボランティア団体さんはそれぞれで活動されているわけで。そこに対して自分たちが教育を、クラスを持って、ボランティアの人たちを集めました、ではそちらへ行ってくださいというのはなかなか難しくて。

今までは多分、自分で探してくださいという感じだと思います。それはそれでいいかもしれないけれども、受けている人たちに今年聞いてみると、私、これを受けた後はどうしたらいいのでしょうかという人が、正直多いわけですね。では、自分でボランティア協会に電話して、空いているかどうか聞いてくださいみたいなことになってしまったので、それはちょっとあまりにもったいないなというふうに思っています。

○神吉座長 なるほど。ありがとうございます。

はい、シュレスタ委員、お願いします。

○シュレスタ委員 シュレスタと申します。

先ほどつながり創生財団からと、あと、今も外国人コミュニティの人はどこにいるかということが分からないということがありましたけれども、その辺は、例えばネパール人だったら私が教えることができます。リーダーたちがここにいますとか。

例えば、ネパールの場合は、ネパール政府が認定した海外ネパール人協会があるのですね。その中で日本支部もあるのですよ。彼らが一応日本にいるネパール人をまとめているという感じですね。何か情報があったら、彼らのいろいろな媒体から、Facebookページとか、いろいろな媒体から情報を発信している場合があるのですね。

同じように、多分、ベトナムの場合もあると思うし。それぞれのコミュニティは、固まっているのはあるのですけれども、最近、私もそこに参加しているけれども、コミュニティの代表者というか、いろいろな国のコミュニティの人たちが集まる会議が1つ、できているのですね。そこに、韓国人の代表者、ネパールの代表、インド人とかスリランカ、インドネシアとか、多分ミャンマーとか、今大体8か国ぐらいのコミュニティをリーダーとして代表している方々が集まっています。だから、その人たちにどうやってアクセスするかということだと思うのですけれども、その人たちを通して、各地域に、ネパール人、あるいはベトナム人がどういう活動しているのか、誰がその地域につなぐことができるのかというのを探せばできるかなというふうには、私は思うのです。そこで自分のほうからも何か協力が必要であれば、ぜひやらせていただきたいということが言いたいですね。

以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。

今おっしゃったコミュニティのリーダーの集まりというのは、そもそもどうやって始まったものなのですか。

○シュレスタ委員 それは、もともと、外国人材に関する円卓会議というのがあって、御存じだと思うのですが、私がそこに参加しているのです。そこにももちろんほかの国の方も2人ぐらいはいるのですけれども。

もともと韓国人の方が、こういう集まりのイニシエーションとして、やはり政策づくりには自分たちが参加しないと、何か自分たちに合うような、あるいは自分たちの声が届かないので、やはりそういうところに外国人の声も届けるような、何か会ができないかなという話が出てきて。

そこに、いろいろな国の人たちが一応いて、今、「外国人有識者会議」という名前がついているのですけれども、次の会議は2回目が17日にあるのですよ。そこはもちろん、日本人の方々、J C I Eの毛受先生とかもバックアップしていただいているとか、そういうところもあるので、そこはできるだけほかの国にもつなげていこうというふうになっているのですね。今つながっているのは、先ほど言った国々の方々がそこにつながっているのです。

○神吉座長 ありがとうございます。

加藤委員、お願いします。

○加藤委員 インターカルト日本語学校の加藤です。すみません、どの切り口で話そうかと思ひながら聞いておりました。

まず亀井委員がおっしゃっていた、ボランティアで日本語を教えるということを習った方たちの出口の問題って、ああ、そうだなと改めて思ったのです。私たちの組織は台東区にあって、台東区内もそうなのですから、近隣のところからボランティアの先生のための日本語の教え方であったりとか、あとやさしい日本語だとかというのを頼まれたりとかして、実際に実施して、アンケートなどを見ると、よかったですとかって書いてある。でも今思ったのが、それに出た人たちは結局どこに行っているのだろうと、改めて自分が今思ったのです。

私たちは教えることを頼まれているので、その先に対しての責任があるわけではないのかもしれないですけど、やはり先がないと習った意味がないですよね。それと同じことが、私たちが仕事として日本語教師養成講座という、本当に教師を養成するものをしているのですが、やはり一番大きい問題は出口だと、これは明らかに思っているのです。

そのときに、今までは本当に、言ってみれば、私たちのようなところは留学生に教える人を育てるというのが主流できたけれども、今、本当に世の中が、法律なども含めて、生活者であるとか、就労とかというくくりも、目に見えて文字でも表されている。そうするとこちら側も、日本語学校に就職する人を育てるのではないという認識も明らかに持っているところです。そうしたときに、生活している人、就労している人。就労している人も実は生活者であるわけですが、何かそういったところで、私たちとすると、なるべくそういった場を見に行くみたいなチャンスというのは、しているつもりなのです。けれど、そういったところがもっともっと推進されることで、お互いの接点ができるのではないかなという辺り、それが一つです。

私の中で、外国人の人たちに、どういうふうに日本になじんでもらうかとか、そういうと

ころも一つなのですけれども、やはり日本社会、日本人、日本企業、そこが変わらないことには、いつまでたっても変わらないのですね。そこにダイレクトに行くという方法も一つあって、いろいろ働きかけとかしていますけれど。

でも、日本語の先生になろうとか、ボランティア教室に通おうとかという人たちは、まず第一歩として、その方たちを理解しようと思っている方たちなので。その方たちをそういった場とまず、マッチングさせることが、さらにその向こう側にいる日本社会とか、企業の人とかというのを変える一歩になるかなというのはとても思っているのも、何かそこを心して推進していきたいなというふうなところですよ。

最後、もう一つなのですけれども、知る機会というのがやはりないなというふうに思っています。去年も東京都さんと、日本語学校を何とか各地域にある教室とつなげようみたいなことの試みの、実は半歩ぐらいしかないのですけれども、なかなかやはり難しいなととても思ったのです。

そうしたときに、認識として、まだまだ学校側も、行きたいけれど、どう行ったらいいかわからないみたいなところもあるということも事実ですけれど、学校って、例えば私たちの学校は台東区にあるのですが、私個人は、住んでいるのは府中市なのですね。そうすると、私はどちらにも属しているわけです。

学生たちも、別に台東区内だけではなく、いろいろなところに住んでいるのですね。教師に関しても同じことで、ほかの市や区でボランティアをやっているという人も、結構思いのほか多いです。なので、あまり区内とかそういったことにこだわらないで、もっと広く知ることということが次につながるのかなというのは、常日頃思っているところです。

以上です。

○神吉座長　ありがとうございます。

今、加藤委員のお話を伺って、最初の支援をしたい人はどんどん来るのだけれども、出口をどうするか、それは同じように私も感じていまして、特に東京都の場合は、支援したい人ってどんどん来るのですけれども、その人たちと一緒にやっていく、支援団体をつくる人とか、そういった人が意外と育っていないというところは、結構大きな課題にこれからなるのではないかと。要は、マネジメントする人、経営する人といってもいいのかもしれないですけれども、その辺りも別の観点からやっていかなくてはいけないのだらうと思います。

例えば、子供の支援の場合などだと、従来は外国籍、外国ルーツの子供の支援はしてなかったのだけれども、子供の支援をしている団体というのが、今かなり外国人、外国ルーツ

の子の支援に入ってきて、そこがかなりいろいろなことを担い始めていて、大分行き先が増えてきているような印象を持つのですけれども、それでもまだまだ足りないと思いますけれども、成人のそういった居場所とか日本語教室、また共生の場みたいなことも、もうすこし、しっかりとして継続できるような団体、それが、ボランティア団体はあるのですけれども、そこをもう一步踏み出すところの団体というのが何かあるといいのだろうなど。

これは今日の議題に絡めると、国に対して、例えばそういう団体をつくる時の支援とか、今、日本語教育の場合だと、空白地域と言われる、行政区域内に日本語教室がないところは、3年間アドバイザーを派遣して、立ち上げ支援をしますというスタートアップ事業がありますけれども、同様に民間でもこういったことをやりたいというところに伴走していくような、伴走支援みたいなものがもう少し出てくるといいのではないかなと、今、伺っていて思いました。

○事務局 事務局です。

東京都では、在住外国人の生活を様々な観点から支える在住外国人支援事業助成というものに取り組んでいまして、これまで四つのカテゴリー、コミュニケーション支援だったり、日本語教室などの開設だったり運営だったりがありました。ただ、昨今ここまでニーズが増えてきている中で、より生活に密着した伴走型の支援、例えば妊産婦の健診に付き添うとか、あとやはり親の困り事に寄り添うといったような、そういうきめ細かい支援活動をされる団体が、これまでこの助成を使っていた団体の中から生まれてきていますし、新しい団体というのも少しずつですけれども増えてきている。そういう団体の活動を支援していくというのもとても重要になってくるかなと思っております。その一環で、もしかしたらこういう地域日本語教育での関わり方というところもタッチポイントとしてあるのかなというふうに考えています。

○神吉座長 ありがとうございます。

○薦田委員 よろしいですか。

○神吉座長 薦田委員、お願いします。

○薦田委員 武蔵野市国際交流協会の薦田と申します。

今のお話を伺っていて、ボランティアをしたい方というのは本当にたくさんいらっしゃるんですけど、私たちも募集をするとたくさんいらっしゃるのですけれども、ただ、本当にひと昔前、10年前と大きく変わっているのは、個人個人の方が自由になる時間というのが非常に限られてしまっていて、なので、コーディネーターが細切れの時間をつないでいくようなこと

をやらなければならなくなった。

武蔵野地域だと、以前は、本当に企画から取り組んでくださるようなボランティアの方が複数いらっしゃったのですけれども、今本当にそういった方を探すのが難しくて。結局、頼まれたらやりますよ、この時間は空いていますよという形のボランティアの方が増えているので、先ほどおっしゃったように、それをコーディネートしたり取りまとめしたり、グループをつくっていくというリーダー的な方を育てていくというのが非常に重要だし、またそれが本当にボランタリーに見つかるのか、ある程度そこは何らかの費用的なサポートが必要なのではないかなと感じます。

以上です。

○神吉座長 分かりました。ありがとうございます。

その辺りも非常に課題でしょうね。世代の問題というのは、いろいろな支援セクターで恐らく起きていることなのだろうと思いますね。

今のお話を伺っていると、今日まだちょっと出てきていない連携先として、やはり社会福祉系の団体、専門性を持ったところとのつながりというのも、非常にこれから重要になってくると思うのですが、その辺りは何か皆さんのほうでありますか。

一番に思い浮かぶのは社協、社会福祉協議会だと思いますけれども、それ以外も含めて、ソーシャルワーカーとか、何か外国人支援と社会福祉ということで、何か事例またはアイデア等ありますでしょうか。

○薦田委員 よろしいですか。

○神吉座長 薦田委員、お願いします。

○薦田委員 武蔵野市国際交流協会の薦田です。

外国につながる子供ではないのですけれども、市内に子供の学習支援と、こども食堂についての情報共有をする連絡会ⁱというものがございまして、そちらでたまに集まって、例えばヤングケアラーについて研修を受けるという機会がございます。そこで私も大きな気づきがありますし、困っているのが外国につながる子供だけではないし、いろいろな切り口で、いろいろな子供たちが困っているのだなということも分かって、一緒に情報共有しながら取り組んでいけるかなと思っています。

以上です。

ⁱ 子ども・コミュニティ食堂及び子ども学修・生活支援合同ネットワーク

○神吉座長 ありがとうございます。

長谷部委員、お願いします。

○長谷部委員 すみません、長谷部です。

今、神吉先生が社会福祉協議会というふうにおっしゃっていて、それはもちろんすごく重要な担い手だと思うのですけれども、もう1個前に出た、スタートアップをどう支援するかということって、私も頭からすっかり抜けていて、なるほどと思ったのですけれども。

これは私が事例を持っているというわけではなく、実は、日本の事例でもなくて、先週、イギリスで、CLAIR（自治体国際化協会）の皆さんと、イギリスの様々な機関を回って、多文化共生に関する活動をしている、行政機関、民間団体からいろいろお話を聞かせていただくという機会があったのです。その中の一つに、いわゆるビジネスのスタートアップ支援をするソーシャルビジネスの担い手の方が、NPOも、NPOというかチャリティーという言い方をしていたのですが、チャリティーのスタートアップにも関わるようになったという団体があったのですね。

私、どうしても、福祉とか、どちらかというとビジネスになりにくいところの方々の団体のことしか、頭に浮かばないのですが、ただ、逆に先ほど神吉先生が言ったみたいに、それは、もしかすると大きく考え方を変えたほうがいいところもあるのかなと思っていて。

近年は外国人支援といわれるような分野にも、ビジネスで活動している団体というのが幾つかあって、それで成功している団体も幾つかあると思うのです。日本語教育とか福祉のことに関してビジネスの人を入れろというのではなく、団体を立ち上げて継続させていくというところに関しては、もしかすると、もうすこしビジネスのマインドとかそういうスタートアップの経験があるところに、逆にNPOを立ち上げてもらうとか、そういうことを通じて若い人を動員してもらうとかというアイデアがあったほうがいいのかもかもしれないなというのを、今、神吉先生の話とか、ほかの皆さんのことを聞きながら思いました。

そういう活動をしているところは、海外では本当にスタートアップ企業を応援するところがチャリティーに関してもスタートアップを支援しているという話があったので、何かそれが、自分の知っている事例ではないので、役に立つかどうか分からないのですが、アイデアとしてあってもいいのかなというふうに思ったということだけお伝えさせてください。ありがとうございます。

○神吉座長 ありがとうございます。

問題意識の一つが、やはりいろいろな区市町村があるので、本当に日本語教育ってどうし

たらいいのですか、というところから始まるところもある中で、すごくとがった事例がどんどん出てくると大変なので、あえてそこまで言わなかったのですけれども。

まさに今、長谷部委員がおっしゃったとおりだと思っていて、ソーシャルビジネスとして立ち上げるということは、特に東京みたいな都市の規模感でいくと、もっとどんどん出てきていいのだろうなと思っています。そういったことも含めて、いろいろな形でやれるといいのだろうなと思います。

ですから、例えば、日本語教育に関する専門性は持っていないのだけれども、ソーシャルビジネスの立ち上げには、実は行政職員として少し関わったことがあるのですよね、という人がもしいるのであれば、そういう人は、逆にこの地域日本語教育の担当としてできることが、もしかしたら違う切り口からあるかもしれないというのは、そういったことも考えていいのではないかなというのは思いました。

あまり話しすぎないようにします。これぐらいにしておきます。

もう一つ、先ほど加藤委員がおっしゃっていた、教師の養成というのが、いわゆる学校で教える、日本語学校で教えるという人の養成だけではないよねという辺り、ここも非常に重要なのかなと思うのです。それは育成する側も、される側も、どちらも意識していかなくてはいけないところだと思うのですけれども、それについて、もう一言だけいただいてもいいですか。

○加藤委員　そうですね、ちょっと期待されている答えになるか分かりませんが、インターカルの加藤です。

今、まさに、法律がこの4月から変わって、日本語教育機関も認定を受けなくてはいけないのですが、日本語教師養成も登録というのをしなくてはならず、私たちは今まさにその真ん中にいるのです。

そのときに、私自身が自分のところでとても意識したのは、留学生のためだけの人を育てるのではないという意識です。その中で、かなりの時間数を、生活もそうだし、就労もそうだし、留学もちろんやっています。あと、児童生徒とか、海外とか、あと難民の方たちとかというカテゴリーに分けて、その方たちに教えている人たち、そこを支えている方たちに出ていただいて、まずは知ってもらう。

養成の段階で、自分がどこに行くかまだ分からない人たちに、まずはそのことを知ってもらって、では私はこちらに行こうかなとか、後になってからもあんなのがあったとか、違う場においてもそれがあるのだということをととても意識してほしいと思ったので、今その準

備をされていて、いろいろな方に御協力いただいています。養成する側が、今回、ここを変えられたのは、ある意味自分たちにとってはとてもよかったなと思っています。

なので、輩出する出口というのも、決して日本語学校だけではないという認識で、そこをつくっていかなければというところでのこの会議で、今、改めて認識を持てたことは、入り口だけを今まで考えてきましたけれども、改めて出口を考えたいというところで、私が今まさに思っていたのはそのことです。

○神吉座長 ありがとうございます。まさにその御意見をいただきたかったところでした。

ほかにはいかがでしょうか。関連することでも、また別のことでいいですし、まだ出てきていない方向としては、これから都として、逆にボトムアップ的に、国に制度設計とか、体制整備という観点から、何か言っていけること、できることもあるのではないかというようなこと、その辺りも含めて、今の関連の話でもいいですし、新たな観点でも構いませんので、皆さん御意見があればお願いいたします。

亀井委員、お願いします。

○亀井委員 せたがや国際交流センターの亀井です。

国の話の前に、加藤先生がおっしゃっていた中に、区市町村の連携というか、垣根を越えた活動というのが、やはり東京都として果たしていくのであれば、そこは僕たちとしてもすごく期待したいところなのですね。

せたがや国際交流センターとしては、ボランティアの教室というのを我々が抱えているわけではなくて、外側に、昔から活動されているボランティア団体の方々がたくさんいらっしゃって、そういう方々に活躍してもらっているのです。なので、先ほどおっしゃったように、世田谷に住んでいるとか、働いているとかという人たちって、別に世田谷だけで暮らしているわけではなくて、いろいろなところで暮らしてらっしゃって。

世田谷でやりたいのだけれどもちょっと合わないとか、例えば目黒区は国際交流協会がボランティアとして募集していて、そこで外国人の人と話すことができるみたいな話があったりするのですね。そうしたら、我々としても、ではそちらで活躍してもらってくださいというのは簡単なのですから、そこも何かもうすこしうまく、周りの団体で協力してやっていきたいと思いますし。

東京日本語教室サイトみたいな、すばらしいウェブサイトができたりしているので、これは東京のボランティア教室を網羅的に探していくことができるという意味ではものすごくいいと思うのですけれども、ではこの先、これを見て探してもらうことはできると思うので

すけれども、結局、探した後は、自分でアクセスしてねというふうになってしまうというのは、そこに1つ、壁があるような気がするのですよね。

だから、このサイトに関して言えば、その次どういうふうに、もうすこし何か案内ができるとか、もうすこし団体とつなぐようなことができるといいかなというふうに思っていますし、最初の話に戻りますと、近隣の区とか市町村のところともっと連携して、日本語教室とかボランティア教室でもそうなのですが、連携していきたいなというふうに思っていて、区の中とか市の中だけで頑張っているのはすごくつらいし、その辺のところの調整を、何か東京都にもすこしお願いしたいと思っています。

○神吉座長 ありがとうございます。

東京都のほうにも調整を、ということで。

○事務局 事務局です。

東京都の役割としましては、ユーザー視点と、あとやはり地域日本語教育の体制づくりを中核として推進する、自治体、区市町村をどうやって支えていかななくてはいけないのか、その二方向で考えなくてはいけないかなと思っています。

各地域の地域日本語教育の受け止め方ということについても、まだいろいろと差があるということは事実ですし、取組についての方向性であるとか、そこにも差異が出てきている。

ただ、サービスというか、そういう地域日本語教育の機会をきちんと保障する、特に初期日本語を保障するということは、行政の役割だというふうに考えていますので、この地域では受けられるけれど、転居したこちらでは受けられないということがないようにしなければいけない。そういう意味で、我々東京都としては、区市町村の体制整備を、きちんと東京都のあり方を踏まえてやっていただかななくてはいけないということが、一つ役割としてあります。

もう一つは、先ほど亀井委員がおっしゃった、いろいろなところ、生活もその区域内で収まるものではない、地域というふうに考えたときに、生活者としてはその区市町村だけではないはずだと思います。そのときに、例えば財団で取り組んでいる中域ネットワークであるとか、ある程度の生活圏の中で、同じような課題を抱える自治体同士が結びつくことで、より質の高い、充実した行政サービスが提供できるのではないかと考えております。

今回、外国人防災、昼間の防災の取組というところで、北多摩のほうでネットワークづくりを進めていくという方向になりましたけれども、そこに北多摩の、まさに薦田委員が入っていただいているような、委員の皆様からも、日本語教育ということもやってみたいない

うような御意見をいただいたので、そういう場を通じて、課題認識を共有して、皆さんのやる気につなげていけたらいいなというふうに考えています。

○神吉座長 ありがとうございます。

○事務局 すみません。長谷部委員が、時間の都合で退室されるということなので、最後に一言いただいてもよろしいでしょうか。

○神吉座長 一言ではなくても、存分に御意見をお願いいたします。

○長谷部委員 そんな存分にはございません。今日も相変わらず勉強になりましたので、どうぞ引き続きよろしくお願いします。申し訳ございません。途中で退室させていただきます。よろしくお願いいたします。

○神吉座長 ありがとうございます。

では、薦田委員、お願いします。

○薦田委員 武蔵野市国際交流協会の薦田です。

今お話にありました北多摩ブロックなのですけれども、実はすこし交通の便が悪くて、なかなか1か所で何かをして全員参加というのが難しいという課題はあるのですけれども。ただ、人口が割と少なめの市が集まっていて、しかもその中で特に地域日本語教育に関してはかなり差があるという地域なのです。

例えば、武蔵野だけで初期日本語教室をやるとなったときに、そこまで需要があるのかどうかという心配も実はありまして。なので、ブロックで何かできたらすごくいいなというふうには考えています。東京都が音頭を取っていただいてというところにすごく期待しております。よろしくお願いします。

○神吉座長 事務局に質問なのですけれども。

そういう中域ネットワークというものをつくるときに、都としては、こことここは組むみたいなの、既存の中域のグループってあるのでしょうか。

○事務局 もともと社会福祉協議会のブロックの割り方がございまして、そこを参考にさせていただきながら、今、中域のブロックというのを考えているところではありますが、ただ、必ずしもそこに限定せずに、もう少し柔軟に、地域性であるとか、もともとのやり取りがあるところがあれば、柔軟なブロック割というのも考えていきたいというふうに思っています。参考にしているのはそういうところです。

○神吉座長 分かりました。

その既存のブロック割を使ったほうが、それぞれの区市町村は組みやすいみたいなこと

は、やはりあるものなのですか。

○事務局 やはりももとの社会福祉協議会等のつながりで、既存の会議体で顔を合わせている関係だったりするので、共有がしやすいという話は聞いております。

○神吉座長 分かりました。ありがとうございます。

ほかに、関連することでも、その他でも構いません。

先に、山形委員。それから矢崎委員、お願いします。

○山形委員 TNVNの山形です。私たち、2年か3年調整会議をやってきて、最初にアイデアをつくって、それを特に初期日本語教育を保障していかないとはいけませんよねというのがあり、そして、今年手を挙げた区市町村で、ゼロレベルを受け入れるような教室を立ち上げていますね。たまたま先週、TNVNの役員会があって、いろいろな地域で活動している団体の方々のお話の中で、東京東部の教室の人は、区がゼロレベルの教室をつくって、それでいきなりそれを知らされて、私たちびっくりしましたとか、それから西の方のエリアでは、日本語学校の一つにお願いして、初期日本語教育を何回やりますということを知らされましたというような、ボランティア教室側からするとびっくりというような印象を持った人が複数いました。

これって、ゼロで日本に来ました、平仮名も読めません、あいうえおの音も出せませんというレベルの人たちについては区市町村主導で教室をつくってもらい、ある程度話せるようになったら、地域の日本語教室に、ここからはお願いしますと持っていき、さらには、日本語教室でやっていくのは卒業、それよりも、もっと日本人の社会に参加して、いろいろなことを一緒にできるようになるのが理想ですね。

この、「地域での暮らし（資料4の2枚目）」の図がありますけれども、そういうふうに流れを先のほうまで見た上でつくっていくためには、ゼロレベルの教室も、受け皿となる地域の教室の人たちと一緒に意見交換をすることから始めることが肝要かと思います。先ほど、どなたかから地域の教室も参加させてくださいというようなお話がありましたけれども、そういうことって大事ではないかなと思います。いきなりポンと、はい、では今日からこの人たちお願いしますではなく、私たちはこういうことを考えています。ついてはこういうことをします、プロの教えることができる人たちに頼みました、何回シリーズで実施します、そのあとは引き受けてもらえますか、と話をもっていった方が、地域の人たちにも受け入れやすいのではと思いました。

だから、何か初期日本語教育をやらなくてはいけないと思って、取りあえず、では私たち、

何もノウハウを持っていないから、学校があるからそこをお願いしましょう、ではないですね。学校で教える人たちだけを養成しているわけではないという考えの下にやっていたところもありますけれども、何かもっとその地域のボランティア教室を見に行くということもたくさんしていただきたいなと、ボランティア現場でやっている私は感じました。何かつながっているかどうか分かりませんが、一言申し上げました。

○神吉座長　ありがとうございます。

今のお話を伺っていて、まさに山形委員がおっしゃったように、まずこれをやらなければならないからというところで、目の前に見えている課題のところをやるということで、学校をお願いしますというのは、そういうこともあるのだろうなと思いました。

ただ、全体として、やはり理想としてやっていただきたい方向というのは、まずその域内の日本語教育の全体像がどうなるのか。どこを行政が直轄でやり、どこは、住民または民間と協力してやるのかという、その辺りをつくっていただくということを、いろいろなところに丁寧に説明していく必要があるのだろうなと思いました。

その中で、では、ボランティア団体にはここをお願いしたいのです、ここは行政でやりますけれどもというような、何かその画が欲しいですね。そうしないと、せっかくの取組が逆に地域の分断を生んで、共生の取組が分断を生み出してしまうみたいな、それは避けてほしいなと思うところではありますね。

ですから、いろいろな形で今度また、コーディネーター会議もつながり創生財団でやりますので、そういったことも含めていろいろお伝えできるといいのかなと、お話を伺って思いました。

先に矢崎委員。それからタイン委員、そして亀井委員の順で、お願いします。

○矢崎委員　今、私も話を聞いていて、やはりコーディネートをする人がとても大事だと思っていて。それは外国人の方とのやり取りをするだけではなく、行政側とお話しするだけでなく、既存の地域で既に活動し、思いを持っている方々とのお話を丁寧にする人が必要だということを、インターカルトさんの研修などでもきちんとお伝えいただくのがよいのかなというふうに思いました。いろいろな人とのやり取りの中で、日本語教育というのが成立していくのだと思います。

それと、もともと申し上げたかったのは、企業というのがやはりポイントになってくるのかなと、お話を伺いながら思っていました。私が思ったところは3点あって、一つは私たちの活動がきちんとできているのだろうかという評価を、私は企業の方に意識的にしていた

だきたいと思っていて、お願いをしたりする。それは、何か自分たちとは違う視点で、今やっている活動が、本当に目標をきちんと設定できていて、それを私たちは目指して活動できているかという評価というのが、私たちにはちょっとできなくて、中に居すぎるというのがありますし、もともと手法もよく分かっていないというがあるので、割合とそれは結構外資の方とかにお願いをしたりすることが、1点、私が企業に期待する役割としてあります。

それからもう一つは、大勢のボランティアの方が関わってくださっていて、既に皆さんいろいろ企業にお勤めの方々もいらっしゃるの、その中でボランティア活動をしてくださっている方が、ただ外国の方とのやり取りをする存在ではなくて、その方々に相談するとすごく早く解決することとかはたくさんあるので、そこにいる人をどういうふうに、私たちの活動をよりよくするために、より輝いていただけるか。計画性とか実行していくときのスキルとか、広報の仕方とか、やはり企業で学ばれていることはたくさんあって、それをうちの活動でも生かしてください、プロボノⁱⁱで、というところが大事なかなと思っています。

あともう1点は、先ほど亀井委員から、外国の人たちがあまり見えない地域もあるというお話があったと思うのです。でも、私たちのところに勉強に来ている方々も、介護施設とかいろいろなところでやはり働いている方がたくさんいらっしゃるのですよね。

多分、世田谷の介護施設でも、ほぼほぼ外国の方が働いている。そこがやはり外国の方の集まる一つの間だとすれば、その方々の日本語教育をどうしていくかというのを、何か考える必要があるかなと思っています。それは企業の中から来るものも多いかもしれないのですけれども、多分、自治体として介護施設が、例えば行政にとっても大事な場だとすれば、一緒に考えてくださったりするのも、何か一つあるのかなというふうに思いました。

特に、最近は幹部候補なのですけれども、もう少し日本語力があればと御相談を受けることが多くて、外国の方がただ雇われているほうではなくて、ほかの外国の方とか、場合によっては日本人の新入社員とかに介護のやり方とか、いろいろなことを教える側になってきている。そこで日本語が必要です、みたいな御相談を受けることが増えてきたかなと思っています。そういうところが何かうまく、いろいろな方との協力で進んでいけば、お年寄りの方にとってもよりよい何か、介護の場、それは介護だけではないと思います。いろいろなところで、多分、清掃関係とか、あと調理場とか、いっぱいいらっしゃると思うのですよね。何かその辺りを考えているところです。

ⁱⁱ 職務上の専門知識・技術を生かして行う社会奉仕活動

以上です。

○神吉座長 今の話で行くと、地域で、各区市町村で体制を整えていくときに、必ずしも日本語教育とか外国人支援の人ばかりではなく、むしろいろいろな事業を進める経験とか、そういうものも含めて協力してつくっていくのがよりよいだろうと。

○矢崎委員 はい。そのほうが人も増えるし、専門性をお持ちの方が、多分、日本語教育の人だけだと足りないと思っています。

○神吉座長 そうですね。ありがとうございます。

タイン委員、お願いします。

○タイン委員 ベトナム出身のタインです。2点、お話しさせていただきます。

まず1点目は、繰り返しになるのですが、定住者になる外国人、留学生は確かに日本語学校で勉強して、自ら日本人と交流したい、日本語をもっと早く上達したいという方でしたら、余裕がある方でしたら、いろいろな方法があります。日本への留学は、ほかの国と違って、出稼ぎという留学生もたくさんいます。恐らく半分ぐらいになっているのではないかなと思います。

そうすると、彼らは本当に、学校の後にアルバイト、稼がなくてはいけないという方々で、今、東京都でも11万人ぐらいの留学生、家族滞在の場合でしたら、まさに定住者さんになりまして、ただ、滞在でもアルバイトをかけもちするなどして、とにかく稼ぎますという方々になる。そうすると忙しくて、教室に参加したくても参加できない。参加するときに、日本人が対応すると、日本語が分からないので難しいという問題があります。

対象者に、中長期、日本に滞在している方の中に、日系人とか第二世代、いろいろな方々がおりまして、日本語が全く分からない方も対象者になるのですが、その中でも一番多い方々へ、どうやってアプローチするのか。

2点目は、つくっているカリキュラムとかそういうものをどうやって、彼らに宣伝するのか。まさに、プロに任せれば簡単ではないかなと思います。幾ら頑張っても、彼らにはなかなかアプローチできない。そうすると、例えば外国人のコミュニティを運営している団体、会社とか、外国人とたくさん接点を持っている方々をお願いして宣伝してもらおうとか。もちろん利用者の問題もありますが、そういう方法があります。あと、間に入って、外国人が日本語を教えるということももちろんできますし、母国語である程度なじみの仲になることで、彼らに参加してもらって、日本語を、自分の国の日本語が分からない方々に教えてもらうという協力をしてもらおうのも一つの方法かなと思います。

以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。

そうしたら、亀井委員、お願いします。

○亀井委員 せたがや国際交流センター、亀井です。

今のタインさんのお話を受けて少しお話しさせていただくと、留学生の話があったと思うのですが、大学に来ていて留学生の方々とか、あとは、日本語学校の留学生もそうだと思うのですが、留学生も生活者であることは間違いないのですが、我々が、例えば交流会をやりますといったときに、来てくれるという人たち、それから、先ほどの繰り返しになってしまいますけれども、そういうのに参加してくれる人たちは、やはり留学生の人たちが正直言って多いのですよね。それは、留学生の人たちは日本語を勉強したいとか、日本人と交流したいとかというモチベーションがあるので、そういう人たちには我々もアプローチしやすい。だけれども、先ほどおっしゃったように、そうではない人たちもいらして、そういう人たちにどうするかというのが難しいところで、我々の課題だと思っています。

それから、もともと私が話をしたかったのは、マッチングの話です。一つはサポーター講座と我々が言っているボランティア養成の教室を卒業した人たちを、既存のボランティアの団体のところにどうやってつなげるかという話があったと思うのですが、それとはもう一つ別に、マッチングの話で言うと、行政、今は私たちがやっていますけれども、行政がゼロベースの人たちの保障をするために日本語教室をやります、それはもう絶対正解だと思うのですが、世田谷でもそういうふうにやっています。僕が今その課題だと思っているのは、その人たちを、今度、本当にゼロベースの教室なので、その人たちが終わった後にどうすればいいかというのは、またそこが問題になってしまっている。

では中級講座をつくれればいいのか、それはあるのかもしれないですが、今のところは、ボランティア団体をお願いします、しかないわけですよね。それで本当にいいのかどうか分からないですが、実際それしかできないので。そこをうまくつなげるというのが、やはりある意味もう一つのマッチングとして必要な、学習者の人たちをきちんとボランティアの人たちのところにお預けできるような形にしていくというところまでやらないと、あまり続かないと思うので、そこは一つ問題があるというふうに思っています。

○神吉座長 ありがとうございます。

薦田委員、お願いします。

○薦田委員 武蔵野市国際交流協会の薦田です。

先ほど山形委員が、急に行政が日本語教室を始めてびっくりしたとおっしゃっていたのですけれども、私たちも本当にそうならないように、ボランティアの方たちとよくお話をし、どういう教室だったらやってほしいか、望ましいか、どういうことで連携ができるか、ということをよく話し合ってつくっていききたいなというふうに、今考えているところです。

ただ、本当にボランティア教室につなぐということだけを考えてつくるのでは、やはりアクセスしづらい方にはつながらない、伝わらないのかなというふうに思っています。日本語をあまり勉強する気持ちもないし、そんな余裕もないわというような方に、どうやってアクセスするか。

私たちとしては1回でもいいから協会に来ていただいて、その後、日本語教育とはつながらなかったけれども、例えば外国人相談、困ったときに相談してもらおうとか、何かあったときの情報が提供できるという意味で、教室にはつながらなくても、何とかそういう方たちとつながりたいと思っている、そこは常々御理解いただいて、一緒に協力していけたらなと思っています。

以上です。

○神吉座長　ありがとうございます。

○山形委員　いいですか。

○神吉座長　はい、山形委員、お願いします。

○山形委員　TNVNの山形です。先ほどの亀井委員のお話で、サポーターをつくりました、その行き先として、既存のボランティアグループだけではなく、新たにその人たちに新しいボランティア教室を立ち上げてもらうのはどうでしょうか。区域を眺めて、この辺に教室がないからここにつくるといいよね、みたいに設置してもいいのではないのでしょうか。

○亀井委員　そうですね。

○山形委員　同期で結構、強いつながり、結びつきができるのではないかなと思います。

○亀井委員　ありがとうございます。おっしゃるとおりだと思います。

すみません、よろしいですか。

○神吉座長　亀井委員、お願いします。

○亀井委員　ボランティアの人たちの養成って、今、実際はせたがや国際交流センターの場合はオンラインでやっているのですが、あまり横のつながりがどこまでできるか分からないのですけれども、その人たちを1回集めようとしていますので、本当にその中から、僕らが言い始めるのではなくて、その中から手を挙げてくれるのが一番いいかなというふうに思って、

そこはすごく期待しているところです。

既存の団体ではなくて、別の観点で立ち上げるという人たちもいらっしゃると思うので、そこはもうぜひやってほしいなと思うので、そこを何かバックアップしたいなというふうに思っています。

○山形委員 場所取りが一番大変ですね。

○亀井委員 そうですね。会場の問題が。

○山形委員 そこを、区なり国際交流協会が。

○神吉座長 そこですね。結構、公的な施設で、夜間とか空いているところとかもありそうなのですが、なかなかそこを、ではどうぞと開放するというのが、組織的に難しいみたいところもありますよね。その辺りも、人もそうなのですが、場所もないと、なかなか。

いかがでしょう、あと3、4分ですが、何かありますか。今日はICT関係の話が出ませんでしたけれども、今最後にちらっとオンラインでという話が出ましたけれども、その辺りで皆さんから何か御意見とかありますか。

私もほかの道府県でいろいろなことを聞いている中で、やはり人が少ないところに外国人が増えているので、支援者もないし、教室にも通えない。それで、例えば全県的にオンライン対応していきましょう、みたいところも出てきているのかなというような印象を持っています。その辺り、都内ではどうなのでしょう。

○山形委員 TNVNの会員の中で、100%オンラインで日曜日に活動しているグループもあります。

○神吉座長 なるほど。

○山形委員 皆さんが仕事をしている日本人で、オンラインだから、どこに住んでいてもできますよね。学習者は海外からも参加しているようです。ボランティア教室は、無料ではないが僅かながらお金をもらっている、それはオンライン決済で支払ってもらっているので問題ないということでした。

○神吉座長 なるほど。

○山形委員 私たちもコロナになってオンライン教室を始めましたが、今でもオンラインもずっと続いています。オンラインのよさを強く感じた人たちは、着替えて教室に行かなくてもいい、通う時間も節約できると言っています。オンライン継続の学習者が20名弱いますが、そういう人たちの支払いは銀行振込にしてもらっています。

ただ、スタッフのローテーションが難しくなります。対面教室だと1年たったらほかの人と交代しましょう、ということが出来るのですが、オンラインだと交代を問いかけても、担当スタッフはこのままがいいという返事が戻ってきます。

○神吉座長 ちょっと閉じる感じになってしまうイメージですか。

○山形委員 そうですね。それで、そういう人たちをたまには外に連れ出して、何かイベントに参加してもらおうということを考えていかなくてはと思っています。

○神吉座長 なるほど、分かりました。ありがとうございます。

○矢崎委員 一ついいですか。

○神吉座長 矢崎委員。はい、ではここまでにします。

○矢崎委員 今の話で、東京都さんに強く要望したいのは、せめて公的な場所はW i F i が利用できるように、どんどん補助していただきたいなというふうに思っていて、家でW i F i、スマホで参加する外国人学習者が多いのですけれども、やはり何か切れてしまうとか大変です。でもその公民館に行けば大丈夫だから、そこを使ったらとかいうふうに、一人で利用できるような、どこかのお店とかそういうところに行くのではなくて、何か公的な場所で、せめてW i F i の環境があれば日本語学習の機会が増えるかもしれないと思うのですけれども、意外にW i F i を使えないところが多いので、ぜひそういう施設は全部オーケーというような状況をつくっていただけるといいなと思っています。

○神吉座長 ありがとうございます。

都ももちろんですし、各区市町村がそこをやってくれるといいですよ。

北海道のどこだったか、カニが取れるオホーツク海のほうですけれども、そこはすごく漁業の実習生がいっぱいいるのですけれども、みんながコンビニの近くに週末集まっている。それを見た市長さんが、何をやっているのだと言ったら、W i F i を求めに来ているのです。それで公民館にW i F i、すごく強力なのをつけてくれて、みんなそこでいろいろできるようになったという話があるのですよね。

○矢崎委員 そうすると、公的な場所とつながるきっかけにもなりますよね。

○神吉座長 そう。だから、首長さんとか、もちろん職員さんも含めて、何かそういった実態を踏まえていろいろやったださるといいですよ。

ありがとうございます。そうしましたら、今日、いろいろな観点から御意見をいただきました。大変だと思いますけれども、また事務局のほうで議論をまとめていただければと思います。

では、事務局にお戻しいたします。

○事務局 本当に様々な意見をいただきまして、ありがとうございます。勉強させていただきつつ、ちょっと後からまた御質問させていただきたいなと思うようなこともありつつ、また、追っていろいろお話を聞かせていただければと思っております。

本日の会議の資料、議事録は、東京都のホームページで公開いたします。資料につきましては、一両日中に掲載をいたします。公表資料でございます。議事録については少々お時間をいただきたいと思いますと思っております。

本日はこちらで全て終了になります。今日は長い時間ありがとうございました。

本日の推進会議、これをもちまして終了させていただきたいと思います。本日はありがとうございました。

午後4時57分閉会